

「ダメンズの回心～人は変わることができる～」

ルカによる福音書 15章11～32節

心理福祉学部兼人間福祉学部チャプレン 五十嵐 成見

皆さんは、クリスチャンというと、どういったイメージを持っているでしょうか。どこか清廉潔白で何事にも真面目なイメージを持たれている方が、多いのではないかと思います。

けれども、そのような人格を兼ね備えていることがクリスチャンの条件だったり本質であるかといえば、決してそうではない、ということは、はっきり申し上げたいと思います。もし、清廉潔白で、真面目であることが、キリスト者となる条件やキリスト者であることの本質であるとするのであれば、それは、大きな誤解をしていることになります。

偉大なことを成し遂げたキング牧師やマザー・テレサは、確かな偉大で、常人ではなし得ないことをしました。けれども、それでも、彼らや彼女らもまた、人生の中で、致命的な過ちを犯し、また時には、重圧に押しつぶされそうになり、弱さや限界を何度も感じていたことが、日記や伝記などを読むとわかってきます。それゆえ、キング牧師やマザー・テレサの本当の力の源は、もちろん彼ら自身の持っている人間力も魅力であることは間違いなのですが、自分の持っている弱さや心の貧しさ、自分の限界を感じる非力さを、神の前に率直に露にして祈る、自分の無力さを神にゆだねる信仰だと言えます。

実際のところ、イエス・キリストの周りにいた 12 人の弟子たちは、皆、人間的な弱さを持ち、傲慢さや浅はかさを持った人間として描かれています。彼らが、どのようにしてイエス・キリストに認められたかといえば、彼らの清廉潔白で、真面目な人格によるのでは決してありませんでした。しかし、キリストは、そんな人格の豊かさや貧しさの差によって、彼らをえり好みしたり、弟子の中から除外することはありませんでした。彼らがキリストの弟子であった理由は、ただ一つです、それは、彼らがどんなに人間的な欠けを持っていた人間であったとしても、キリストが選ばれ、キリストが愛され、キリストが受け入れられたからです。

それは、私達がキリスト者であるということの理由にも直接的につながっています。私達が人格的な欠けや、貧しさがないことがキリスト者の条件でも本質でもなく、神が、そんな心の貧しい私を愛して、受け入れてくださっている、神さまの、あるいはまたイエス・キリストの限りなく大きい愛によって私達は生かされている、という恵みを知っている、そのことがキリスト者の本質だと言えます。

そんな事実を、まさに明らかにしてくれているのが、今日の聖書の言葉、イエス・キリストが語られた譬え話、放蕩息子の譬えの話です。あるところに、息子が二人いました。その弟の方が、お父さんに、お父さんが死んだらもらえることになっている財産を、もう生きているうちに受け取りたいと願い出たのです。気前のいいお父さんは、その願いを受け入れ、弟息子は、土地とか、馬とかをたちまちお金に換えて、遠いところに旅立って、遊びたい放題、したいことし放題、放蕩の限りを尽くします。兄息子が後で、弟息子のことを批判をしていますけれども、30 節で、「娼婦どもと一緒に、身上を食いつぶす」

とも書いているので、今でいえば、風俗に使いまくり、またクラブで何人ものきれいな女性をはべらして、高いお酒などを惜しげもなく頼んだ挙句、一文無しになってしまった、ということでしょう。つまり、「ダメンズ」の極致です。さらに追い打ちをかけたのが、自分が住んでいる地方に飢饉が起こり、その日一日食べるものまで事欠いた、ということです。そこで、仕方なく豚の世話をする仕事をしたけれども、その豚の食べるいなご豆を食べてでもいのちをつなげなければならなくなってしまった、というのです。豚、というのは、今ではかわいい動物ですが、この時代の中東地域では、最も下等な動物として嫌われていました。そんな動物が食べる餌を食べてまでも生きなければならないことになって、ようやく、彼は、我に返るのです。自分がかつていた立場の豊かさ、そして、何よりも有難さに気づかされるのです。どん底の底で、ようやく気付いた真実でした。彼は、覚悟を決めて、父のいる家に戻る決心をします。彼は、自分のしてしまったことに気づいていました。「もう息子と呼ばれる資格はない、雇い人として、親子の縁を断ち切られても仕方ない、それでもいい」、と思ったのです。つまり、彼は、もし自分が自分の父親の立場だったら、自分をゆるしてくれるはずなど決してない、ありえない、と思ったのです。それほど大きな過ちと罪を犯した。そういう自覚の中で、とぼとぼと家路へと向かったのです。

しかし、一体どういうわけか、帰ってみると、ただ家から遠く離れていたのに、お父さんが、自分を見つけるや否や、走り寄ってくる。渾身の力を込めて、怒りの鉄拳を下されると思いきや、首を抱き、抱擁して、熱いキスをする。きっと、お父さんは、毎日、息子の帰りをしかも、玄関に立ち続け、じつといつ帰ってくるか、いつ帰ってくるかと、期待を込めて待ち続けていたに違いなのです。そうでなければ、こんな態度をとっさにとることなどできるはずがありません。息子は、申し訳なく思いながら、21 節でいきました。「お父さん、私は天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。」19 節と比べたいのですけれども、最後の言葉が抜けています。「雇い人の一人にしてください。」彼は、言いそびれたのでしょうか。私は違うと思います。その最後の一言を言う前に、お父さんが、その言葉を遮ったのです。そして、この上ない最上のもてなしをして、弟息子の帰りを祝った。これが、お父さんのやり方でした。

しかし、このやり方に納得いかないのが、兄息子の方でした。激しく怒り、父親の弟に対する接し方に憤懣やるかたない、激しい怒りの虜になってしまっていました。しかし、この怒りは、もし、私達が兄息子の立場だったら、よくわかるころでしょう。そして、大事なところは、この弟息子も、この兄息子の怒りの気持ちを心底わかっている、ということです。父親に対して、もう息子と呼ばれる資格はない、と弟が思ったということは、兄息子だって、兄弟として、迎え入れてくれるはずはない、と覚悟を決めていたということでしょう。そして、兄息子の感覚、過ちを犯した者に対する裁きの感覚は、ここにおられる皆さんの感覚、私たちの感覚でもあるでしょう。自業自得だ、自己責任だ、因果応報だ、と。

しかし、父の愛は兄息子の裁きの思いを明らかに超えています。お父さんは、この弟息子をゆるしたのです。「私は天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。」悔い改めの言葉を聞いて、ぼろぼろに擦り切れた服、すり減らした靴底を見て、もはや、わが息子は、裁くことではなく、つまり親子の縁を切ることもなく、赦すことによるのみ、親子の縁を回復することによるのみ、立ち上がることができる考えたのではないのでしょうか。

私は、このお父さんは、兄息子と同じ裁きの感覚を持っていたと思います。お父さんは、多くの雇い人や土地を所有している財産持ちです。きっと、商売の世界をいろいろ切り抜けていた人です。とんでもなく能天気で世間知らずのお人好しであれば、多くの財産を保持することなど難しいでしょう。お父さんは、現実世界の正義の感覚をよく知っている人です。それであるにもかかわらず、お父さんは、わが子を赦した。それは、我が息子は、縁を切るのではなく、それでも赦し、愛することによってでしか、本当の人間性の回復はない、と思ったからです。そう信じたからです。

イエス・キリストは、このお父さんの愛のありようそのものが、神の愛だと告げられました。そして、キリストは、この愛が、私達一人一人に及んでいるとことを告げるために様々な場所へ行かれました。

キリスト者とは、自分がどうしようもない愛の貧しさ、弱さを抱えた者であるにもかかわらず、神さまによって愛され、赦され、生かされていることをただ信じることによって救われている人のことです。そして、この神の愛は、今、あなたにも注がれている。そのことを信じることは、何にも勝る、何にも代えがたい人生の値打ちがあるのではないのでしょうか。そして、その希望が確かにあることを聖書は告げています。

2021年11月9日 聖学院大学全学礼拝